

〈デイズニー映画は好きですか?〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

ミッキーマウス、リトル・マーメイド、

ピーター・パン、ライオン・キング、ダ
ンボ、シンデレラ、ピノキオ、ジャング
ル・ブック…。一九三七年、世界初のカ
ラー(総天然色)長編アニメーション「白

雪姫」が製作されて八〇年。デイズニー
映画は今も新作が作られ、世界中で愛
され続けている。必ずハッピーエンド、

殺人場面はなし、ラブシーンはキスマで
といった健全路線は、ときには原作を捻
じ曲げてまでの事なかれ主義とか現実

逃避とか批判を受けながら、世の東西
を問わず世界中に行き渡っている。
だが、こんなふうに見られ、こんなふ

うに映画が人を救った例は、寡聞にして
聞いたことがない。あつと驚き、深い感
動に包まれずにはいられない。映画と家
族愛のドキュメンタリーである。

アメリカ・ニューヨーク州に住むサ
スカインド一家。父親はウォール・スト
リート・ジャーナル紙の辣腕記者、母親

も元記者で、子どもは息子が二人。弟の

オーウェンが二歳の時に突然言葉を話
さなくなり、周りの誰ともコミュニケーション
を取れず、孤独な世界に閉じこ

もつてしまう。医者には自閉症と診断、一
生言葉を話せないかもしれないという。
失意の中でもあらゆる手を尽くしなが

ら、家族は常にオーウェンの心に寄り添
うことを第一に、ときには医者の指示に
も従わないことも。例えば、オーウェン

のデイズニー・アニメ好き。毎日ビデオ
がすり切れるほど繰り返し見るのを止
めさせるよう医者から言われるが、母

親のコーネリアはオーウェンにとって
デイズニー・アニメがいかに大切かがわ
かっていたので、気の済むまで見せた。

オーウェンが六歳のある日、いつもの
ように、他人に意味の通じないままに一
人でぶつぶつぶやいている言葉が、実

は毎日見ているアニメ「リトル・マーメ
イド」のセリフではないかと父親のロン

が気付く。思い切って自ら、オーウェン
の大好きなデイズニー・キャラクターの
「オウムのイアーゴ」になりきって話し
かけると、オーウェンも役柄になりきつ
て言葉を返した。うれしさにこみ上げる
涙をこらえながら会話を続けるロン。よ
うやく会話を取り戻した父と子—もら
い泣きしそくない場面だ。それにして
も、ビュリッツァー賞受賞のジャーナ
リスト(国政欄編集委員)というロンの
俳優顔負けの声色のうまさはどうだ。

デイズニー・アニメは全作品のセリ
フが言えるほど愛し、精通しているオー
ウェン。セリフを覚えるうちに言葉を
徐々に取り戻していったのだ。大学では
オーウェンは「デイズニークラブ」を主
宰、本物のデイズニー・キャラクターの
声優をゲストに呼ぶなど大活躍。他人
とのコミュニケーションが回復するに
つれて、エミリーというガールフレンド
もできた。大学を卒業すると家を出て、
アパートで一人暮らし。二階にはエミ
リーの部屋がある。だが、それは、オー
ウェンの乗り越えるべき次なるステッ
プの始まりでもあった。

清らかなデイズニー・アニメでは手
に負えない現実の青春の葛藤…。何だ
か、オーウェンのこれからは気になっ
てきた。

『ぼくと魔法の言葉たち』

アメリカ映画 (91分)

監督: ロジャー・ロス・ウィリアムズ

出演: オーウェン・サスカインド、ロン・サスカインド、
コーネリア・サスカインドほか

4月8日よりシネスイッチ銀座ほか全国順次公開

© 2016 A&E Television Networks, LLC. All Rights Reserved.

